

第6回 地球温暖化に関する懇談会 資料

2008年10月20日 枝廣淳子

国民の関心は非常に高い

96%：「温暖化に関心がある」

「自分は何をしたらよいのだろうか？」という声の広がり

温暖化を止めるためには

人為的な排出量を地球の吸収量以下にする必要がある。

地球のCO₂吸収量 = 31億トン（炭素換算）

人間の活動による排出量 = 72億トン（2000-2005年平均：
炭素換算）

60～80%の削減が必要

各国：地球の物理的な限界に合わせた目標設定をするように

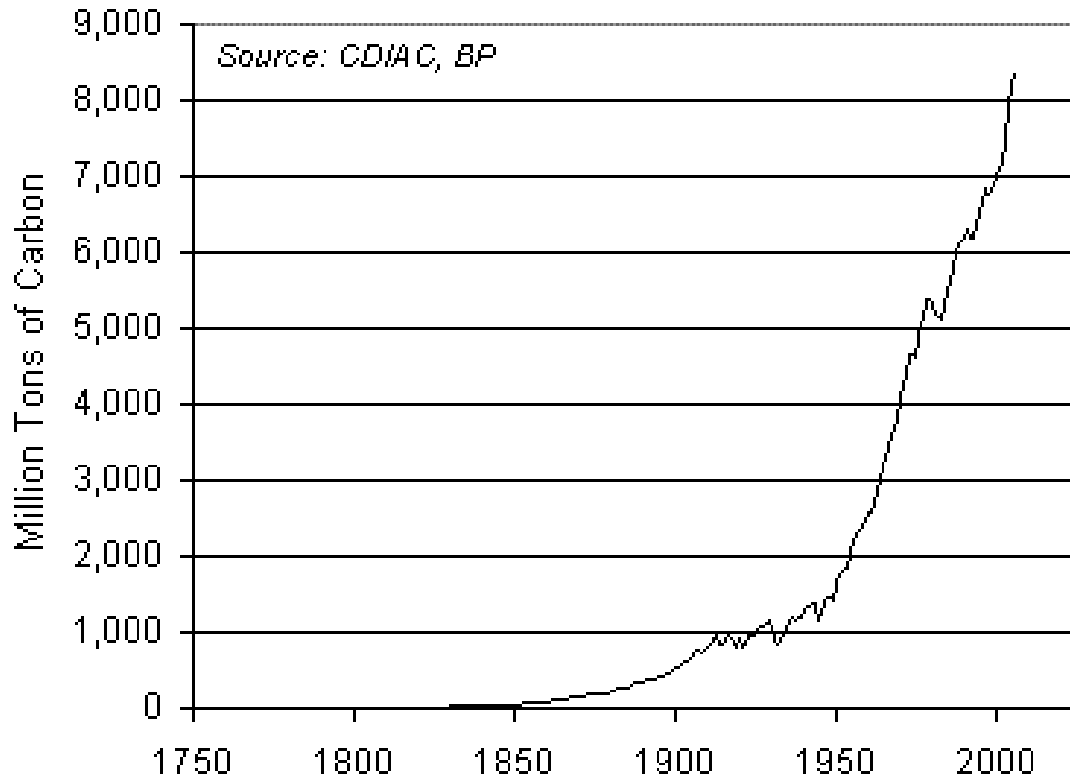
フランス：2050年までに75%削減

英国：2050年までに60%削減 80%削減

日本：2050年までに60～80%削減

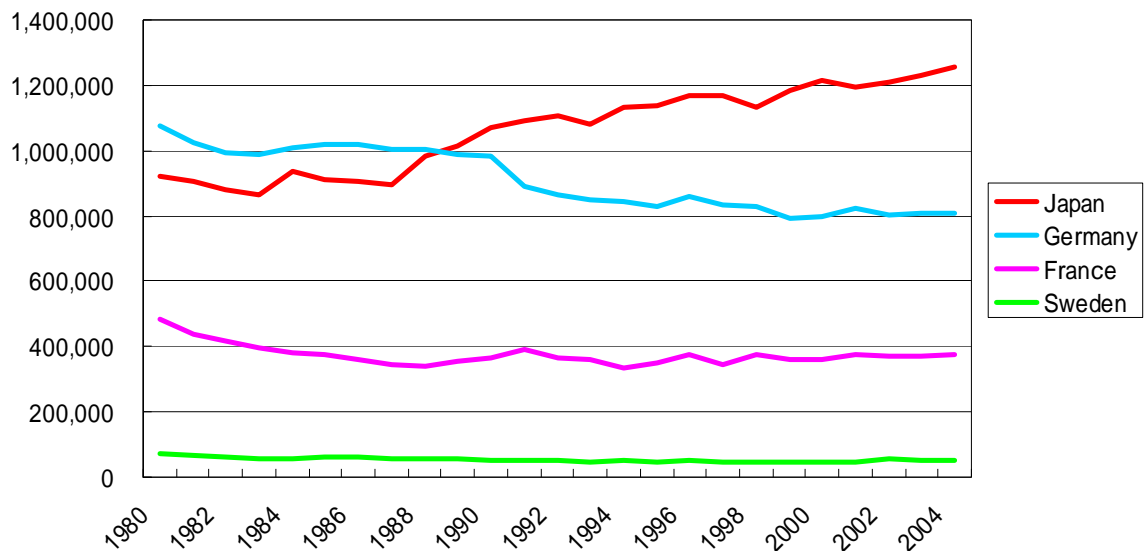
世界の CO2 排出量：減るところか急増している

Global Carbon Dioxide Emissions from Fossil Fuel Burning, 1751-2006



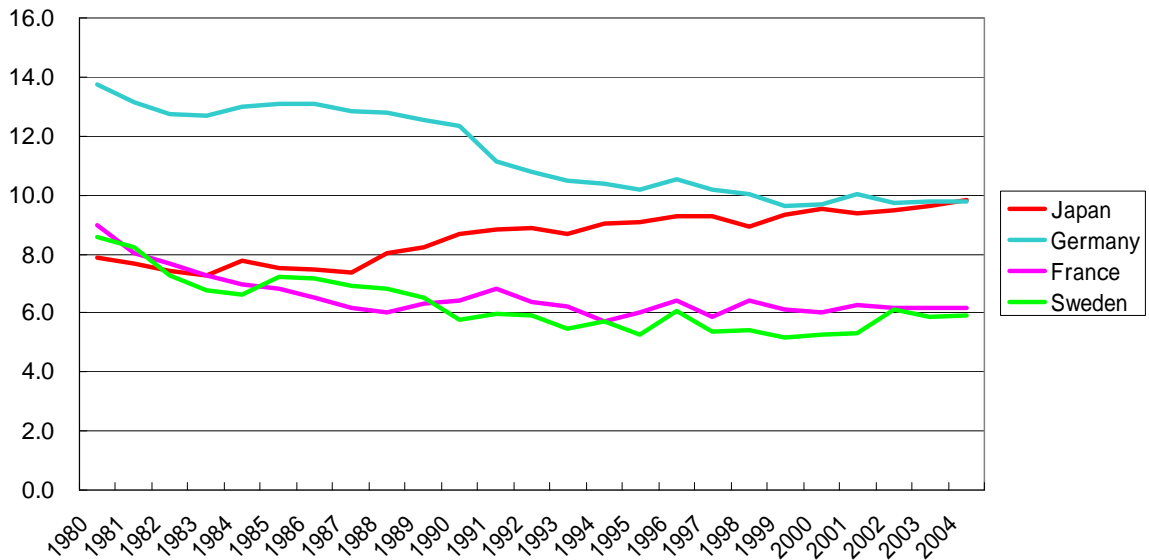
先進主要国の CO2 排出量（国別）

CO2排出量



先進主要国の CO2 排出量（国民一人あたり）

一人当たりのCO2排出量



減らすために必要なもの

- ・ 意識 : 日本、高い
- ・ 技術 : 日本、高い
- ・ 仕組み : 日本に足りない部分

減らすための仕組み = 炭素に価格をつける

排出量取引 = 産業界の炭素に価格をつける試み

技術革新を進め、コスト効率のよい削減をする基盤

（炭素税 = 家庭部門の炭素に価格をつける）

世界：「炭素原則」が経済を動かしつつある

排出量取引の市場もリンクが始まっている

日本でしか通用しない仕組み 世界のお金の流れから排除

日本のプレゼンス、経済への悪影響

国内排出量取引の試行的実施

効果 = 仕組みの実効性 × 参加者の広がり

多くの参加を得て始められるのは素晴らしい

仕組みの実効性を高めていくことに注力できる

目的 = 温暖化防止 そのために実効性のある CO2 削減

効果は CO2 削減量で測られる

原則：上限（キャップ）を設けたうえで取引（トレード）

自主行動計画の目標：2012年までに90年度比±0

それ以降の大きな削減に向けての国内排出量取引が必要

レビューのタイミングと項目が重要

アポロ：飛行中の95%は予定軌道外

到達すべき地点と現在地との差を常に修正し続け、
最終的には目的地点に着地できた

中期目標

IPCC 報告：2020 年に 1990 年比 25～40%削減が必要

EU：2020 年に 20～30%削減（1990 年比）

ドイツ：2020 年に 40%削減（1990 年比）

バックカスティング（あるべき姿）とフォアカスティング（いまできること、技術開発が見込まれていること）をすり合わせながら、最も効果的な進路を選ぶ必要がある

検討会は大事な試み

検討会の基本的な目的

× 「負担が大きくてできない」と言うためではない

× 「温暖化を止める」という大目標を損なってはならない

長期目標へ至るいくつかのオプションとその負担を示し、

議論して選んでいくことで、国民や産業界を巻き込んだ形で

削減を進めていくこと

国民をいかに巻き込むか？

京都議定書の二の舞になってはならない

議論にかかわることで、行動変容につながる

× 政府が決めて提示する、伝える

決めるプロセスそのものを伝え、どのように巻き込んでいくか？ そのプロセスで出てきたものを、いかに策定や実行に活かしていくか？

チームを作って進めるべき

世界が低炭素化へ向かう時代

お金はどこに流れるか？

日本はそこにいるのか？

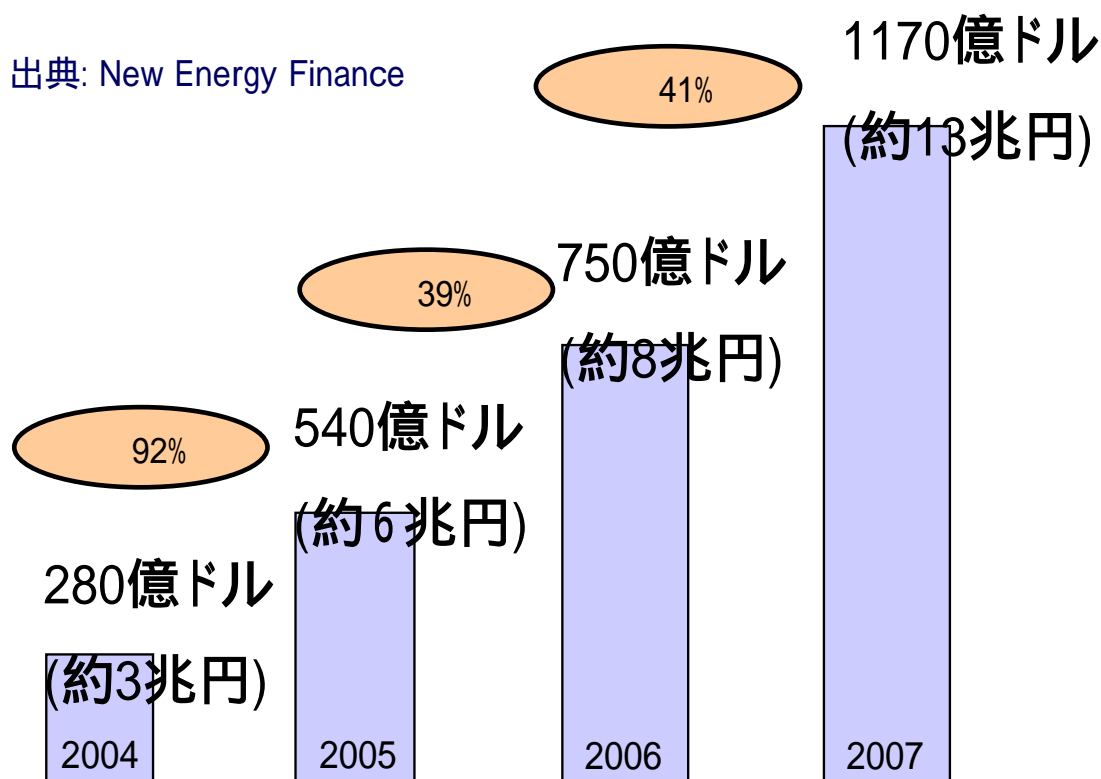
そこにいるためにはどうすべきなのか？

コスト論ばかりではなく、ビジネスチャンスとしてとらえる

資源やエネルギーのない日本だからこそ、低炭素時代に

資源やエネルギーのない時代の世界をリードできるはず

急成長する自然エネルギーへの投資



自然エネルギーの「6重の配当」

「20世紀のドイツの産業・経済・社会に貢献した自動車の役割を、21世紀は自然エネルギーが果たす」

1. 電力供給の主力に 14%(07) 45%(30)
2. CO₂削減: 1.1 億トン
3. 産業経済効果: 4 兆円
4. 雇用効果: 25 万人
5. 地域の活性化効果
6. マネーのグリーン化